

Title	ことばとであう。アナウンサーの仕事を通じて
Author(s)	吉見, 由香
Citation	臨床哲学のメチエ. 11 P.28-P.29
Issue Date	2003
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/3671
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ことばとであう。 アナウンサーの仕事を通じて

吉見 由香



「ことばとであう。アナウンサーの仕事を通じて」

1、動機

「あの時、あの人に、あの一言を言っていたら、わたしの人生変わったのに」

「……口は災いの元……」こんな思いは誰の胸の中にも、大なり小なり存在するものである。ことばは、生き物である。

時には、龍のように暴れ、風のようにそよぐことばを仕事のツールとして、早12年。しゃべり手としての職業的側面に於いても、当年30歳のひとりの女性としても、ことばを媒介にして、自らの感情を表現すること、他の人間との交通を活発にすること、また、その手段としてのことばを的確に選びだすことの重要性そして、難しさを口増しに感じている。しゃべり手(アナウンサー)という職業への理解を深める、また、日本という風土で生活をする以上逃れられない日本語、身近なことばに対して、繊細な感覚を養う、この2点を軸に、福井高校での授業に臨んだ。

2、授業内容、風景

今回わたしが用意したのは、1 基本の発声、2 自己紹介、3 ニュース原稿、4 ラジオロ(曲紹介)の4点である。

授業の導入部分として、まずは、アナウンサーの根底部分を感じてもらった。しゃべり手(アナウンサー)の仕事は主に2つに分けられ、必要とされる能力は4部門ある。

仕事

- 1、読み手(ニュースや、ナレーション等)
- 2、表現者(ラジオのパーソナリティ、ロ等)

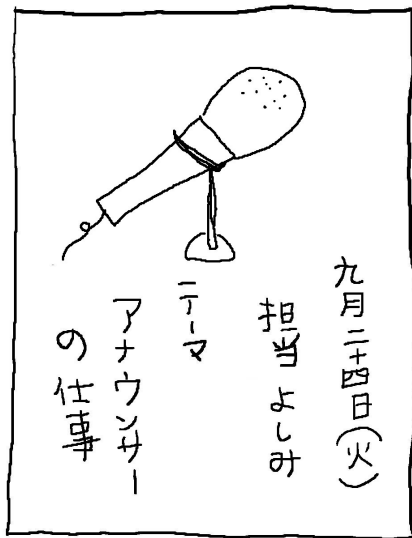
能力

- 1、読む技術
- 2、発声を支える身体機能
- 3、言語能力（表現能力）
- 4、感性（感情）

また、そのどの部分にも、幼い頃の読書量で決まる日本語総合力と、リズム感などが要求される。など、なにげない話すという行為も、不断の努力が必要であることを紹介した。

授業を展開するにあたって、お年頃の高校生達が、大きな声を出してくれるか、という懸念があった。しかし、座席表を作成するために、名前の漢字を生徒達に順に説明してもらったところ（例：大吉の吉に、目で見るの見るで、吉見です）、ややうつむき加減ながらアイデアをひねり出し、楽しそうに対応してくれた。まずは一安心。

後は、LIRIにあわせて、ニュースの原稿を読んだり、イントロに合わせて秒単位で曲紹介を試したり。U<やラジオで普段、生徒達が身近に触れているものであるだけに、思いのほかスムーズに事が運んだ。



初対面であった生徒達がどのような性格で、どのようなバックグラウンドを持ち、どれ程の能力を持ち合わせているのか全くわからないままでの実技ではあったが、照れながらもたのしそうな瞳が、

かれらの純粋な興味を物語っていたように感じる。ただ、反省点としては、短時間での単発プログラムであったために、表面的な部分のみしか扱えず、今一歩踏み込んだ地点までは到達できなかったことである。

3、まとめ

様々な事象が繰り広げられるこの広い世界。まずは、対象に出逢い、自らの身に微かながらも通して体験してみないと、永遠に、理解の一端とはならない。

出逢う、触れる、感じる。

今回の「であいのてつがく」によって、若いかれらの心に、「ことばノ話す」という単語が彼等なりの解釈で書き加えられたとすれば、嬉しい限りである。もちろん、ことばの源泉は「感情」である。しゃべり手として現場に立つ中で、常にその必要性を感じてきた、感情面でのトレーニング（通常、それは主に俳優に向けて

行われるものであるが、わたしは、それを「感情のメンテナンス」と呼び、日常生活でも十分に応用可能であると考え）も機会があれば、体験していただきたい。

今、世界は何が起こるか解らない無気味な深度を、たたえている。その世界を分け拓く道具としては、わたしたちは、いまは、ことばしか持ち得ていない。教育現場に於いても、またおとなも含めてことばに対しての、愛情、尊敬、恐れが希薄になってきている今だからこそ、ことばによって、世界を分け拓き、自らを表す訓練を積んでほしいものである。花にも剣にもなることば。長い人生、花を摘んで歩く方が、ずっと、豊かである。

（よしみゆか）